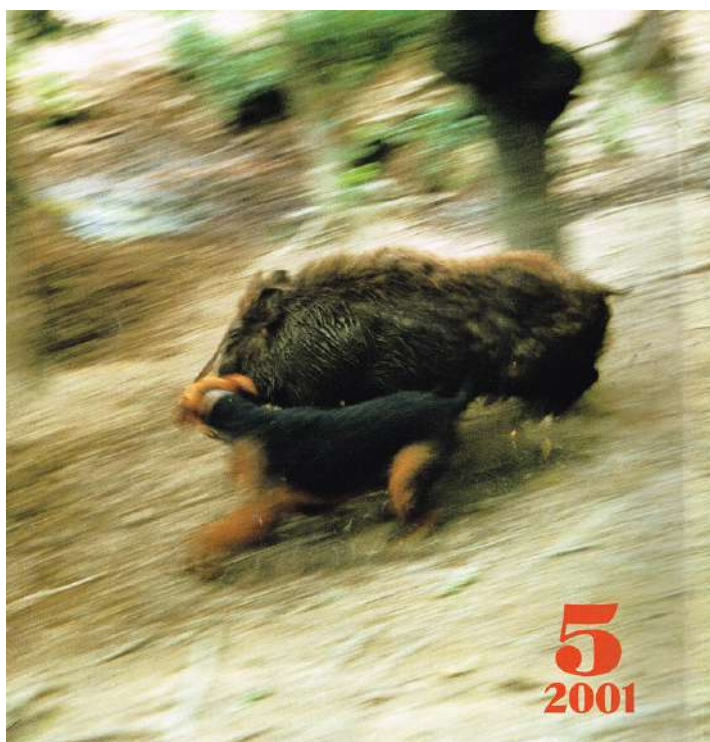


北 どりくろあ

第56号 2020年11月1日（毎月1日発行）



イノシシのイメージとして「狩猟界」2001年5月号の表紙の画像を転載。50年以上の歴史を誇る「狩猟界」も2009年に休刊している。

イノシシの被害と猟師の実情

—— 広島県猟友会庄原支部、

岸昇会長に取材

赤川仁洋

わたしが営んでいる古本屋 家や畑の周りを囲っているん
のお客さんには農家の人も多 だが、まるで人間の方が檻の
い。よく話題に出るのが獣害 中で暮しているようだよ」
である。丹精込めた作物が、 そう言って諦観の表情で苦
収穫前に食べられてしまう。 笑を浮かべる。過疎化で高齢
とくにイノシシの被害が多い 者が多くなり、鉄柵や網、電
ようだ。 気柵等の設置も大きな負担に
「入って来られないように柵で なっている。

庄原市は以前より、農家に
わなを仕掛けてイノシシを捕
獲、駆除することを奨励して
いたが、2018年1月より
「有害獣処理施設」（庄原市
是松町）を稼働させた。それ
以前は、わなでイノシシを捕
獲しても処理は自己負担で、
畑に穴を掘って埋めるなどす
るしかなかったが、食肉とし
て活用できるようになった。
廃棄手数料と同額で肉を引き
取るという形で、負担金は実
質ゼロで済む。

中国新聞の記事によると、

イノシシの処理施設への搬入
（狩猟分も含む）は、初年度が

119頭で2年目の昨年度が
197頭。しかし、わなで捕
獲したイノシシを施設に運ぶ
までが大変だ。殺処分する必
要があるのだが、「地区の猟師
が引退してしまい、頼むこと
ができなくなった」と、危険
を覚悟で自分で処理するケー
スも増えている。

狩猟免許には網猟免許、わ
な猟免許、第1種狩猟免許（散
弾銃、ライフル銃）、第2種狩
猟免許（空気銃）があるが、
第1種狩猟免許を持つ猟師が
少なくなっている。後継者不
足は、猟師の世界でも深刻ら
しい。

広島県猟友会庄原支部の会

長、岸昇さんに話を聞いた。
狩猟経験40年を数えるベテラ
ンだが、「敬老会（満75歳以上
が対象）に入ったから、そろ
そろ引退を考えている」。山歩
きで体力のいるイノシシ猟は、
数年前から手を引いていると
いう。

猟友会のメンバーは、一昔
前は旧庄原市だけで288人
（ワナ192人、1種91人、2
種5人）。現在は合併した庄原
市で百人ぐらい。旧庄原市で
は27人で、最盛期の十分の一
まで減ってしまっている。

「若い人が入って来ないので
ね」と岸さん。今は手軽に楽
しめる娯楽がたくさんある。
「数だらけの獣道を犬と一緒に
回すんだから、そんなしんどい
思いをしてまで猟師をやるう
とする者はいませんよ」と自
嘲する。

お金もかかる。銃や弾薬は
もちろん、狩猟免許の登録料、
ハンター保険等々。狩猟免許
や銃の所持免許は3年毎の更
新が必要で、その度に手数料
や講習料が必要になる。

相棒である猟犬の世話や費
用も大変だ。血統の良い子犬
は50万円を超えることもある
という。手塩にかけて訓練し
た猟犬も、狩りの時に傷を負っ

たり死んでしまうこともある。その治療費も人間のように保健が効かないので高額になる。

「猟師になりたいという若い人から、どれぐらい儲かりますかと訊かれたことがある。映画や小説に出てくるマタギをイメージしているんだろかね」

岸さんは苦笑する。猟師でお金を稼ぐのは難しい。岸さん自身、レジャーや害獣駆除のボランティアの意識しかないという。獲物が食肉として売れたとしても、必要経費をいくぶんなりとも補填するぐらいだ。

イノシシが増えているのには、様々な要因が重なっている。もちろん、猟師の減少もその一つ。広島県の現在の狩猟期間は、解禁日の11月15日から翌年の2月いっぱいだが、以前は毎日のように猟に出かけていたそう。今は多くても週末や祝日だけ。それだけ獲れる数も減っている。

年末がイノシシ猟の一区切りなのには理由がある。年を越すとメスが発情期に入り、それをオスが追いかけてまわすので、脂肪が落ちて肉質が固くなるという。オスは食べる暇もなくメスを追いかけるので、爪先がすり減って丸くなるので、足跡で雌雄の区別ができるほどだ。気性も荒くなる。メスも妊娠すると、防衛本能からか、気性が荒れる。

年明けに妊娠したメスは、梅雨時に子供を産む。羊膜が雨季の湿気で柔らかくなって、出産が楽なのだ

いう。そのサイクルが、地球温暖化の影響なのか狂ってきている。解体すると季節外れの時期に妊娠していたり、まだ子供の個体が妊娠していたりと早熟の傾向が強くなっているそう。

イノシシが里に出てきて田畑を荒らすのは、人工林や耕作放棄地の問題がある。スギやヒノキなどの植林によって、どんぐりなどの実をつける広葉樹林が減少。耕作放棄地の茂みは、イノシシの格好のエサ場や寝床になっている。

これは、全国各地で毎日のように報道されているクマの被害にも当てはまる。大規模なダムや支流の小河川にまで設けられた砂防ダムがゴギやアマゴなどの魚を減少させ、冬眠前のクマは山の果実やブナ科のどんぐり類を食べるしかないのだが、野生の果実には豊凶が伴う。今秋はどんぐりが不作のようで、腹を空かせ

たクマが市街地まで出没している。ちなみに、県内のツキノワグマは西中国地域個体群として、環境省により絶滅の恐れのある地域個体群と指定され、狩猟による捕獲が禁止されている。駆除に伴う猟師の発砲には、公安委員会の特別な許可が必要になる。

岸さんは、猟友会の仲間と共に、庄原市の有害鳥獣処理施設のイノシシの解体を手伝っている。処理したイノシシの肉は、高野町の道の駅等で販売、評判が良いそうだ。手早く処理して丁寧に血抜きすれば、臭みが取れて良質な肉になる。出荷できない肉はドッグフードやスッポンの餌に加工、廃棄で焼却処分するのは5パーセント程度だという。

「皮を剥いで骨を抜いて肉をスライスするのは立仕事で重労働ですよ」銃を使っている狩りのイメージが強いが、食肉の処理も猟師の大切な仕事である。狩った獲物はちゃんと食べて無駄にしない。

猟犬は心強い相棒だ!

処理施設に運び込まれるイノシシの数はどんどん増えていて、今年はずでに300頭を超えているという。それだけ、イノシシの被害が増えているということでもある。

前出のわなにかかったイノシシの殺処分だ



が、猟友会の猟師に任せられた方が良いというのが岸さんのアドバイスだ。庄原市役所の林業振興課(☎0824・73・1124)に連絡すると、猟友会のメンバーの協力者のリストを教えてくれる。檻や箱わなだと心配ないが、くくりわなに片足だけかかった状態では、イノシシが反撃してくる危険がある。まさに猪突猛進、ときにはワイヤーの絡まった足を引きちぎってでも突進してることがある。

「ハンターは残虐であってはならない」、日本大物狩猟倶楽部副会長だった森國興氏の言葉である。氏は未開の狩猟民族に憧れ、世界各地へ旅をした。天や神に感謝して、獲物を大事にしている彼らの世界に、虐殺も乱獲もなかったと書いている。

動物保護団体から批判されることが多い狩猟だが、猟師の伝統や経験は、弱肉強食の食物連鎖の本能に根ざした文化であると言える。現代人は、スーパードで簡単に手に入る食肉が家畜の生命を奪ったものであるという血生臭い事実を消去している。猟友会の猟師の減少は、日本の狩猟文化の衰退でもあるのだと、岸さんから参考文献として戴いた書籍を読んで実感した。

小田実『何でも見てやろう』

——貧困旅行で世界の底辺を見る

あのころ、つまり青年たちが国際社会での日本の進路を、自ら選べると思わしていた六〇年代前後、生身で世界に羽ばたいた青年がいたのです。しかも一日一ドルの経費で。それが小田実『何でも見てやろう』(61年刊、河出書房新社)でした。

市民の海外渡航が厳しく制限されていた中で、小田実が日本を飛び出せたのは、米国のフルブライト奨学金の資格を得たことでした。この奨学金制度とは当時、米政府が渡航費、生活費を保障し、大学生に研究機会を与えるものでした。小田実は、「東大ギリシャ哲学研究の大学院生」として珍重され、合格します。

ハーバード大学での1年の学生生活の後、帰途に一日一ドルで、北欧ノルウェーを皮切りに、デンマーク、仏、南欧、ギリシャ、アラブ、インドと22カ国を周り、バングラデシュ・カルカッタのどん底生活で力尽きて6ヶ月後に帰国し、そのまま栄養失調で入院します。


旅のスタイルは、「私は作家で、旅の紀行を本にする」との触れ込み

で、現地の民家や、ユースホステルを泊まり歩きます。学究者の顔でその国のハイクラスな社会と、貧乏旅

ぶが、てんでに勝手な方角を指し、誰も本当の方角を教えてくれないのです。異教徒には用心のため、ウソを教えるもいいのだと伝えられているのではないかと、推測します。インドでは、ヒンズー教寺院に寄宿しますが、あてがわれたのは、空

なり路上に2泊する羽目になります。現地の詩人と雄弁に「貧困」を論じた後です。オーバーのまま横たわると、5メートル脇に「老人とも青年ともつかぬやせさらばえた男」がいて、手に薄汚れた包帯をしています。レプラ(ハンセン病)ではないかと想像します。「怖くなり、ユーウツになり、おしまいには泣き出したくさえた」のです。『貧困』も抽象的話題にとどまるかぎり、それは知性にとっての一つの体操であろう」と記しています。

また読んでみたい本⑤4
—— 青年たちに
音谷 健郎



古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第54回は、小田実の『何でも見てやろう』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

【河出書房新社の表紙】

1000枚に及ぶ原稿で、韜晦を混じえた饒舌体の「考える」文章は、読み易くはありません。でも、これでもか、これでもかと、底辺から見たヨーロッパをはじめアラブ、アジア社会は、刺激に満ちています。いま読んで、考えさせられることがいっぱいあります。帰国直後に本にし、大ベストセラーになります。

行ゆえの「貧困」の現実を同時に体験するのでした。特に、アラブ、アジアでは「貧困」が深刻で、ものを考える軸になっています。

間だけです。「いろいろな固形物の上で」オーバーをかぶって眠ったと言う。「憐れだった私の背広は、もうまったくボロ切れのごときものとなって

エジプトでは、言葉が通じず、砂漠のまん中でバスを降ろされ「遺跡の町メンフィス、メンフィス」と叫

いた」と。聖地ベレナスは、良き死を待つ「コジキの街」でした。州都カルカッタでは、宿代がなく

りあげます。次回、高橋和巳『悲の器』を取り

虫と草木と人びとと④④ 中村慎吾 「草花の博物誌」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

ツルリンドウ 二度咲き誇っているような実

冷え込みが厳しくなり、霜の降りる初冬、ツルリンドウの実には真赤に熟れ、枯れた花筒(かとう)から大きく突き出ています。そのようすは、まるで花が二度咲き誇っているように見えます。

秋をかざる花として知られているツルリンドウは花は紫色でよく目立ち、

とても美しいのに、ツルリンドウの花は空色であまり目立ちません。おまけに蔓性で藪の中の小枝に巻きついていてるのでなおさらツルリンドウは人目につきにくく、リンドウのように人びとの間でもはやされてい

ませぬ。わずか源氏物語の「夕霧」のところで「枯草の下から竜胆(りんどう)だけが、我がもの顔にすつとのび、露にしつとりと濡れてるなど、すべて毎年見馴れた晩秋の景色ですけれど」(瀬戸内寂聴訳「源氏物語」巻七による)と、竜胆の名前がでていますが、これは

秋の野を飾る紫色のリンドウではなく、この描写からツルリンドウではないかという説があります。しかし、赤く熟れた美しい実はリンドウとは比べものになりませんので、ツルリンドウは二度咲き誇っていると考えていますし、冬の花だと思うのです。

竜胆はリンドウの中国名、その名前が日本へ伝わり、リンドウと日本語に変化し、竜胆と漢字で書き、リンドウと呼ぶようになったようです。竜胆(リンドウ)の根は竜の胆(きも)のようにとても苦いので、そのことから名づけられたようです。私

シマカンギク 世界に誇る栽培菊の祖先

シマカンギクを漢字で書くと島寒菊、つまり、島にみられる、寒い冬に咲くキクという意味です。ところが名前とは裏腹に、島々や海辺の山には少なく、山地に多いキクなので



今、ダム建設が進められている小塩野の川べりの崖地には、真赤に



熟れたフユイチゴの実とともに、黄金色に輝くシマカンギクの花がとても多く見られ、それを見るにつけシマカンギクは山育ちのキクだなという思いがつもります。

キクは日本人とかかわりの深い花です。今から約三百年前の元禄年間には、二百種ものさまざまなキクの品種が作り出され、幕末に近い文化文政の頃には、一本のキクに多くの花を育て上げ、菊細工や菊人形を発明するに至りました。いろいろなキクの品種を育てて鑑賞したり、菊人形や菊細工を作って楽しんだりする日本独自の文化が生まれ、今でもそ

の伝統は守られています。皆さんの中には学校でキク作りをした人も多いと思いますが、そのキク作りも日本の伝統文化のひとつなのです。

日本人は長い歴史の中で、キクの文化を創造し、私たちを楽しませてくれるさまざまなキクの品種を育ててきましたが、今、私たちを楽しませてくれている栽培キクの祖先のひとつはシマカンギクといわれています。

シマカンギクは本州の近畿以西、四国と九州に広く分布し、国外では朝鮮半島から中国にかけて分布しています。今から千五百年以上もむかし、隣の中国で野生のシマカンギクとチョウセンノギクとを交配し栽培を始めたのが、今、栽培されているキクの始まりといわれています。そして、平安時代に中国からそのキクが日本へ渡来し、日本の風土の中で改良が進められ、世界に誇るさまざまな品種を作り出したのです。

遠く離れて生育していたなかまが栽培ギクに変身して日本に渡ってきて、今、さらにさまざまな姿のキクになっっているようすを、大むかしから変わらぬ姿で生き続けているシマカンギクはどんな思いで見ているのでしょうか。

「つれづれ歌談」⑤

松岡 初枝

霜月は十一月、旧暦では早冬です。霜や氷雨、雪景色、春や秋の色どり豊かな風情は無く、モノトーンの世界に寒さが募ります。心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花
(凡河内躬恆、おおこうちのみつね)

古今集の歌人、百人一首の選者の一人でもある躬恆は、霜のせいで、どの色の菊も白い花に見えてしまい、きれいだなあと、一面の白の世界を詠みましたが、“お”の韻を踏んで作られた歌で、リズムカルな感があります。

十一月というと、三島由紀夫の憂国忌が二十五日で、今年ちよう



ど五十年目になります。若い頃は三島の作品を好んで読みましたが、二十二歳の秋の日の出来事は、今でも忘れません。ナルシスト的な彼の行動、戦後の国のありように異を唱えつつの文筆活動や民兵組織の結成など、常に世の耳目を集める存在であり続けた彼が、切腹という形でその生を閉じた事が、あまりにも衝撃的でした。

・益荒男がたばさむ太刀の鞘鳴りに幾とせ耐へてけふの初霜
(三島由紀夫)

・けふにかけてかねて誓ひし我が胸の思ひを知るは野分のみかは
(森田必勝)

二人が残した辞世の歌です。死に際しての決意と心情ですが、昭和四十五年の秋は、ザワザワと胸が騒いだことを覚えています。

辞世という歌ばかりと思っていいたら、俳句の辞世もありました。神風特攻隊の発案者、大西瀧治郎は、終戦と同時に切腹しました。

・これでよし百万年の仮寝かな
武人らしく、きっぱりとした辞世です。

「おい、生きてるか？」

玄関から声をかけると、くぐもつた返事が聞こえてきた。四畳半のキッチンにまで、本が積み上げられている。

「炬燵を出したんだな」

六畳の居間の中央に、電気炬燵の支度がしてあった。その周囲を、まるで城壁のように本の山が囲んでいる。もっとも、炬燵は年中、出したまま、いつも机として利用している。その上に炬燵布団をかぶせれば、それで冬支度は終了である。火気厳禁、本に引火でもしたら大変だ。「本の函の中で、ヤモリが冬眠してたんだな」

奥山が言った。古い本を函から取り出したら、へこんだ小口の所に小さなヤモリがへばりついていた。動かないので死んでいるのかと触ってみたら、ゆっくりと動き出した。寝起きの顔で奥山の方を見上げると、「キユウ」と愛らしい声で啼いて、おもむろに本の森の中に姿を消したのだそうだ。

「冬眠の邪魔をしてしまったな」

珍しく饒舌にしゃべると、愉快そうに笑った。古本屋のオヤジとしては、本にもぐり込む動物や昆虫は厄介者だが、汚れていても読めればい

いと考えている奥山にとっては、同じ本好きの同居者とも思っているのかもしれない。

もう一部屋あるのだが、完全に書庫になってしまっている。家賃一円の2DKの古びた市営住宅が、今の奥山の城である。実家は大きな農家なのだが、いわゆる限界集落の中にあり、母親を取った後で一人暮らしになったので、町中に越して来

蜘蛛の糸

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子⑤⑩

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

た。孤独は歓迎するところだが、ものぐさで料理ができないので、外食したり総菜を買える店がないと困るのだ。

「おはぎを買って来たんだ」

奥山は大の甘党だ。

「お茶を入れるよ」

今日は機嫌が良いようだ。仕事でピリピリしているときは、玄関で追い返されることもある。新調したの

か、冬用の暖かそうな靴下を穿いていた。

奥山が台所に行ったので、炬燵のテーブルに伏せてある本を取り上げた。珍しく書店のカバーがかけてある。本屋まで買いに行ったのだろうか。奥山が欲しがるといふ本は一般の本屋には置いていないので、いつもネットで注文していた。「これはこれは……」

ことを書いた本を読んだことがある。

(昼間のおまえはどうなんだ?)
蜘蛛に向かつて話しかけた。

アベノマスクを装着した奥山が、錆だらけの自転車に乗って走り去った。その姿が見えなくなるのを待って、車から降りた。バスセンターの待合室のベンチに、淡いピンクのマスクをした女性が坐っている。わたしもポケットからマスクを取り出して装着した。コロナ禍でのエチケットだ。何度も洗って使い回しているのでもくたびれているが、その分、肌に馴染んでいる。

彼女がマスクをしていなかったら、顔を見ただけで満足して、話しかけることはなかったかもしれない。

「こんにちは」

声をかけると、いくぶん警戒した目で彼女が挨拶を返した。

「奥山の友人で、この町で古本屋を営んでいます」

自己紹介して、名前を名乗った。

彼女が大きく目を見開いた。年齢は四十代の半ば辺りか。カジュアルなパンツスーツを着込んでいる。

わたしのことは奥山から聞いてい



たようで、名刺を渡された。
 「出版社の社長さんなんですね」
 「社員も含めて三人の小さな有
 限会社です」

「仕事……、ですか？」
 もちろんですと彼女が頷いた。
 「社運をかけた翻訳本のプロ
 ジェクトです」

すぐに、ちっぽけな社運です
 けど小声で言い足した。

奥山の仕事は、電子工学の英
 語の専門書の翻訳である。研
 究者並みの専門知識を有して、

のある翻訳家はさらにはない。
 田舎に引きこもってからも、コ
 ンスタントに仕事の依頼が入
 っているようだった。

「ハードSFの大作なのですが、
 まだ日本では知名度が低い作
 家なので、うちで版權を押える
 ことができませんでした。奥山
 さんには専門的な部分の翻訳
 を手助けしてもらって、アン
 カーはベテランのライターに
 頼もうと思っていたのですが、
 とりあえずは全部、自分で訳さ
 せて欲しいと言われまして……」

「そのSF小説、恋愛小説でも
 ありますよ」
 彼女が頷いた。

「奥山さんから聞かれたんです
 ね。時空を超えた大恋愛小説
 です。だから、女性にも読んで
 いただけると思うんです」

あの奥山が、いちばん毛嫌い
 していた恋愛小説を読んだ理
 由がわかった。東京の本屋の
 ブックカバーだったのだ、お
 そろく彼女が参考資料として
 送ったのだろう。

女が絡むと、あれこれと忠告
 されるのが嫌で懸命に隠そう
 とする。高額な会員権を売り
 つけられたり、カルト教団の
 信者にさせられたりと、

何度も酷い目に遭っているはず
 なのに懲りないのだ。東京を
 引き払って実家に帰って来た
 のも、手ひどい失恋が原因だ
 った。披露宴の案内状まで
 印刷して、婚約者に逃げられ
 たのだ。

新しい靴下を穿いていたので、
 気になる女性ができたのだ
 ということがすぐにわかった。
 いつもは穴の開いた靴下を平
 気で穿いている。おそらく、
 下着も全部、新品に替えて
 いるはずだ。いったい何を妄
 想しているのか。そのくせ
 服装は頓着しないで、今日
 もいつもと同じ格好をしていた。

「いい本ができるといいですね」

そう言って立ち上がった。

「奥山はいいやつですよ」

彼女の手に指輪がないことを
 確認していた。

「本の好きな人に悪い人はい
 ない、作家の上林さんの言葉
 です」

彼女の目が微笑んだ。

車の所に来て振り返ると、待
 合室の外に出ていた彼女が、
 マスクを取って丁寧に頭を
 下げた。

(面倒なことになりそうだな)

彼女の顔を見て、そう確信し
 た。自然に笑みが浮かんでく
 る。奥山、頑張れ！

まつの古本屋さん どの書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。
 無料の漫画ルームもあります。
 - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30 ~ 18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 15,000円 >



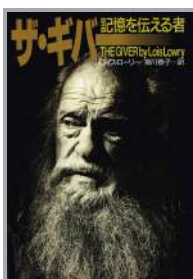
どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「ザ・ギバ」

ロイス・ローリー 著 講談社

「記憶を伝える者」のサブタイトル。すべてが平等で自然をもコントロールした理想郷の近未来、ジョーナスは両親と妹の4人で暮している。血縁ではなく、コミュニティの判断によって家族構成は決定される。衝動が抑制されている社会では、思春期の欲望も薬で管理する。

そしてジョーナスは「12歳の儀式」を迎える。「長老会」によって「職業任命」が行なわれ、「医師」「法律家」「出産母」等々、その子の性質に合った職種が告げられる。ジョーナスの職は「記憶を請けつぐ者」、それは害悪として切り捨てられた過去の記録を唯一伝承する者——。人間の幸福とは何かを考えさせられる一冊。



「感染症は実在しない」

岩田健太郎 著 集英社

インフルエンザも生活習慣病も、がんも実在しない、ショッキングな言葉が小見出しに並んでいる。理解の及ぶ限り要約すれば、たとえ感染症にかかっても、症状が出なければその人は病気ではないという意味。高血圧やメタボなどは、画一的なデータに強引に当てはめた医師の恣意的な病気であると断言。不必要な検査や治療が横行していると警告。



「科学的に正しい医療」は10年も経つと「実は間違っていました」と反証するデータが出てきたりします——、海外勤務も豊富なベテラン専門医の言葉だけに説得力がある。自分の身体を守るのは自分、そんな想いを強くした。

「ぼらかもん」

ヨシノサツキ 著 スクウェア・エニックス

若きイケメン書道家の半田清舟は、展覧会で自作を酷評した書道界の重鎮を殴ってしまい、父親の命令で日本最西端の島で暮らすことになる。世間知らずでジコチューの「半田センセイ」は、人生初の田舎生活に戸惑いながらも、島民たちの大らかな心に包まれて、本来のやさしさを発揮して馴染んで行く。父親の真似ではなく、自分の書体を見つけるべく奮闘。



じいちゃんと二人暮らしのなるをはじめ、島の子もたちや島民たちのキャラがすばらしい。みんなアクが強く個性が強い。ほんわかとしたスローライフとシニカルな現実の笑いの塩加減が絶妙。全18巻、テレビアニメもお奨めである。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・店内で販売した本は、どら紙幣(店内専用通貨)であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくる俳壇&歌壇

妹を忘れし姉の木の葉髪

近藤 昌平

百年の人生想う暮の秋

片岡 正人

手びねりのぐい呑み造る夜長かな

隆愚

転がれるバケツに野分残りをり

大槇 三代子

不苦^{ふくろう}勞のガラスの風鈴秋の暮

赤川 冬人

帰属なき社会なりしと語る目の

松岡 初枝

それも今年の青春のかたち

※参加を歓迎します。

投稿&寄稿

季節の風物詩

隆愚

「山粧う」

秋の山が紅葉する様子を山粧（やまよそお）うと言います。

十一世紀の中国、北宋時代の画家、郭熙（かくき）が、「春山淡冶（たんや）にして笑うが如く。夏山蒼翠（そうすい）にして滴る。秋山明浄（めいじょう）にして粧うが如く。冬山慘

淡（さんたん）として眠るが如し」という言葉を残しています。

春の山のさわやかな初々しさは山笑う。夏の山の青々としてみずみずしさは山滴る。冬の山の枯れた寂しさは山眠る。

めぐる季節それぞれの山の表情を捉えて、まるで山が生きているように、そこに宿る草木が生い茂っては、色づき枯れ、また、芽吹く一年を、

大きな心で言い表わしています。



「新しい村」の感想

赤川仁洋

先月号に掲載した「新しい村」の紹介記事、反響が大きく、感想がたくさん届いています。郷里の戦後の開拓史なのですが、その事実を知らない方が多いことに驚きました。そういうわたしも、その中の一人です。

山崎允さんが旅行の添乗員としてペルーを訪れ時の話は衝撃的でした。ペルーの広島県人会の人から聞いた体験談だそうで、海外移民とい

う当時の国策に乗ってペルーまで来たものの、奴隷のように扱われたということでした。

「風土病で亡くなる人が出ても七人位に達するまで埋葬が許されず、死体と一緒に天井のない屋根（雨が全く降らない）を透いて見える星を眺めて、日本のことを思い浮かべていた。」

見張りの目を逃れて標高七千メートルのアンデス山脈越えをして隣国パラグアイに逃げ、そこで「広島村」を創り上げたのだそうです。日本人移民の多い県は沖縄、熊本で、その次に広島県。自分たちは「移民」ではなく「棄民」、その言葉がとりわけ印象に残っています。

「新しい村」と「庭の大えのき」は貸出希望が多く、なかなか要望に応えることができない状況ですが、今しばらくお待ちください。



短期連載寄稿 林原正好（鳥取県倉吉市）

「毛利家臣の赤川氏について」（その5）

〔5〕信濃国赤川転国と赤川氏誕生

関関録赤川系譜によると、赤川氏は、政忠の時、信濃国赤川に知行を得て転国し、地名を姓として赤川氏を称したとされている。また、『萩藩諸家系譜』は「赤川氏が赤川邑に入部したのは、忠茂の五代孫の政忠のときであるまいか。政忠は赤川邑に住し、在名により赤川と号した。」としており、赤川転国の時期及び赤川氏と称する時期は両者で概ね一致している。

信州在住時の婚姻状況をみると、安房の娘は信濃の豪族真田源太某に嫁いでおり、忠政の娘も小笠原氏に嫁いでおり、信州の豪族と婚姻を結んでいる。

赤川氏の家紋は「鑲に松皮菱」であり、信濃源氏である小笠原氏の支族などが使用しているということであり、信州移住と関わりがあるのかもしれない。

信州時代の足跡としては、政忠の嫡子大膳大夫茂忠は京都で死亡して

いる。左近将監義種、筑前守秀久、左京大夫通守と経て、十郎左衛門重房は甲斐国に住んでいる。重房の嫡重政は蔵人大夫、続く安房は宮内少輔に任ぜられている。

〔6〕備後国（安芸国）入国の経緯

関関録赤川系譜によれば、赤川忠政の時嫡男義重とともに毛利時親に従属して芸州吉田に下向している。毛利時親の芸州下向は延元元年（1336年）とされているので、忠政・義重は南北朝初期の1336年に芸州吉田に下向したことになる。

また、一説として、『庄原市の文化財』（昭和46年刊）には、赤川氏は応永15年（1408年）足利三代將軍義満の命により下野国那須郡佐久山城より転国し、青影城を築いたとされている。

さらに、赤川入国の一説として『西備名区』には、建武中興に寄与した新田義貞は功績によって越後守に任ぜられた際に、越後佐橋荘の毛利親

茂は義貞に従い参戦した。赤川義重も義貞に寄騎して義貞の弟脇屋義助輩下の部将として、備中備後で足利尊氏東上の大軍と戦ったこと、また、赤川義重の孫茂家・茂正はともに毛利親茂の偏諱を受領したとされ、茂正は寄騎し親茂軍として安芸・石見に戦ったことが記されているようである。

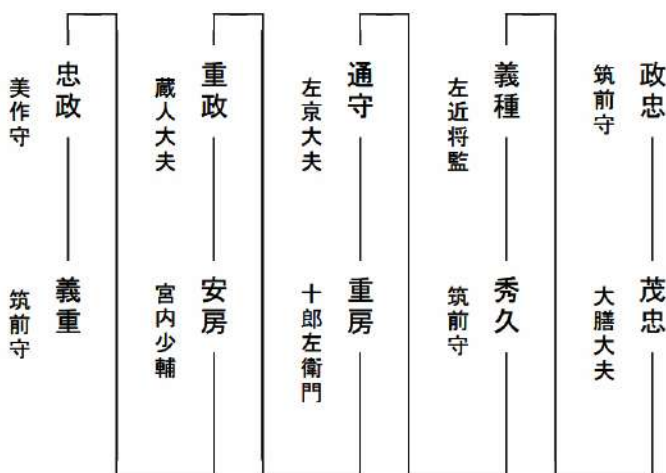
赤川氏入国に関して以上のような三つの説があるが、いずれも確定する資料はない。

私見では、庄原の地に「赤川」という地名が残され、青影城址や地内数か所に城郭の遺構が存在し、青影城主赤川氏の伝説が郷土に言い伝えられていること、また、『日本城郭体系13』によると、「当城（青掛山城）はいわゆる男山と呼ばれる山頂に位置し、郭の配置は比較的単純だが、寡兵による守りをよく補っており、本県（広島県）における室町時代前半期の特色をよく示している。北方眼下の青芳山城は、階段式の縄張りをもつ戦国時代の築城とみられる。また、茶臼山城の立地や縄張りには、実践的な防備性よりもむしろ土居に近い状態であり、赤川氏は当初この城に拠ったのではないかとみられる。このように、赤川氏は、各時代の情

勢の変化にともない、茶臼山城から青掛山城に本拠を移し、さらに戦国時代になると青芳山城に移ったようである。」とあることから、赤川氏は、当初、備後国峰村の茶白山（現愛宕山）に館城を築いて入国して当地に根づき、室町時代前半期に青掛山城に移り、戦国時代に青芳山城に移ったと考えられるのではないかと思う。

いずれにしても、赤川氏入国についての確かな文献が見つかり、探究されることを願うばかりである。

【赤川氏系譜】（『萩藩関関録から抜粋』）



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

森原多美子水彩画展

11月7日(土)～9日(月)
市民ギャラリーアート多愛夢
(庄原市西本町 2-1-21)



(額 森原明良)

備庄焼（備後庄原焼き）「陶芸自修室」

「陶芸教室」ではなく、皆で研究し、
助け合い、切磋琢磨し、知識と技能
を高めていく「自修室」です。庄原
市役所庁舎建設の際、地下より採掘
した粘土を精製、陶芸用粘土として
使用しています。

場所：「総領高齢者活動センター」（庄原市総領町稲草）
開催日時：毎月第2、第4土曜日。
午前9時から午後3時までの自由時間。
料金：諸経費（焼成費も）を含め、粘土 500gにつき600円。
入会金や月謝は不要。
申込先：備庄焼友の会（代表 寺岡隆行 ☎090-7540-9029）

《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
 - 教室&講座案内
 - イベント情報
 - あなたの大切な本の紹介
 - ボランティア・ライター（現地記者）募集！
- ※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

保護犬の里親募集



- ・推定7歳ぐらいの女の子。茶色、タレ耳、半長毛の中型犬です。
- ・避妊手術、8種混合ワクチン、済んでいます。
- ・フィラリア陽性ですが、進行はしていません。現在服薬治療中で、1～3年で陰性になるそうです。
- ・ビビリなところはありますが、おとなしくて吠えたり咬んだりすることはありません。

《連絡先》入船 ☎090-7137-6892

Email: kirifune@docomo.ne.jp

編集後記

◇ 今回の巻頭企画で、
実際のイノシシ猟のこ
とを聞きました。ス
ペースが足りません
でしたが、いつか紹介
してみたいですね。
◇ 先月号の「つれづれ
歌談」で、「照子夫人」
は「輝子夫人」の間違
い。初期配布の冊子
は修正していません。
その他にも校正ミス
が全体に散見。申し
訳ありません。

◇ 徐々には増えてい
ますが、イベントの
未だにコロナ禍の収
束の見通しは立たな
いですが、日本では
コントロールできて
いるようです。賛否
はあるようですが、
日本人の几帳面さ
の良さが、日本人
の几帳面さの良さが
出たのでしょうか。
◇ 炬燵を出して冬
の準備。猫のドラマ
が喜んでます。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052 (赤川)
e-mail: touzin@nifty.com
年間購読料：2,000円(郵送料込)

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第 237 回

ひょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 2 年 11 月 9 日 (月) 9:00~13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

TOPICS

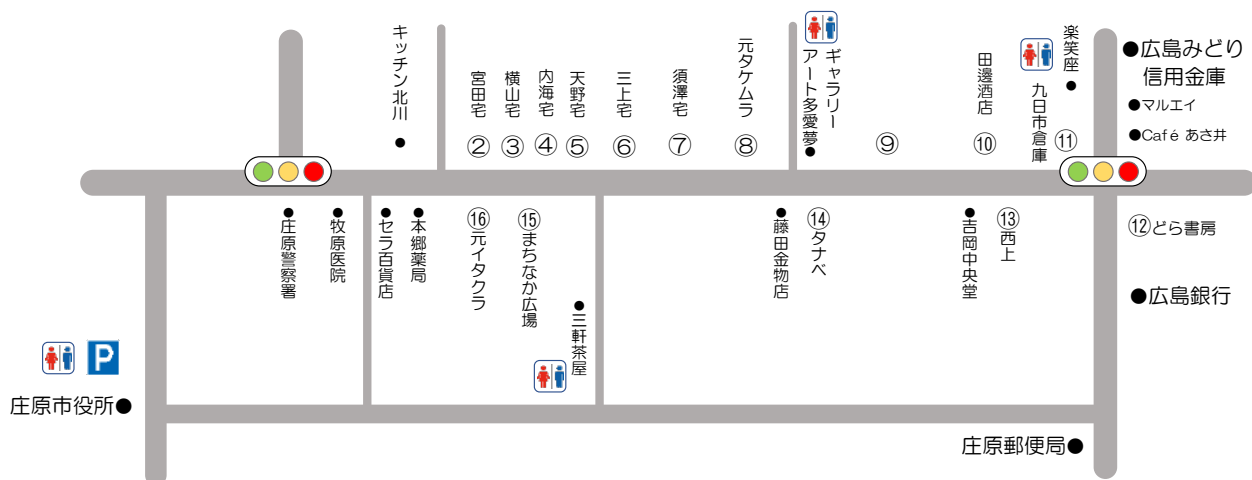
★市民ギャラリー「アート多愛夢」
森原多美子水彩画展

★楽笑座で「まかない食堂」中 止
★楽笑座で「うた声喫茶」中 止

★どら書房 →休憩所あります！！
月曜日と火曜日はお休みです。
但し、九日市の日は営業します。

★きくや →総菜とお寿司の店頭サービス！！
★風龍 →九日市スペシャルで餃子 200 円！

出店配置図



②お休み

③文屋

④お福
郷屋

⑤工房アム
かぐや姫
ぬくもり
ちくちくはうす玉手箱
832g の奇跡

⑥美・sfida・三次サロン
和み屋
クラフトショップ
なかや

⑦農楽会

⑧とらち
二八そば加工所
アーミッシュ
さだっさ
健康企画
ふくふく牧場

⑩克國水産

⑪お休み

⑫どら書房

⑬久代水産
くんえん工房 香豚
KUSUBE 建築工房(株)
吉備路花田 FF

⑭まなへ商事

⑮佐藤園芸
田崎屋
宮川屋

⑯どんぐりーず

出店申込みは、【毎月 20 日締切】 コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

